

和賀岳

東北北部 大荒沢より

1992年3月31日～4月2日

メンバー：田中健、手塚紀恵子

31日（晴）天気予報では全国的に晴れということだったが、昨日からの雨は朝方までしつこく降り続いていた。JRほっとゆだ駅からの朝一番のバスで登山口となる大荒沢集落に向かう。雨もようやくあがり、急速に晴れてきそうな雰囲気だ。大荒沢の集落から林道を1時間ほど歩いて、高下岳に続く尾根に上がる。ここは夏道ではないが積雪量は充分でスキー登行に問題はない。和賀岳なんてめったに人が入らないと思い込んでいたし、おまけに夏道のない所だし、まさかと思ったが、稜線には赤布が下がり、うっすらとシュプールまで残っていて、何だかがっかりしてしまう。高下岳への稜線は、下部こそさすがに藪っぽい、すぐにりっぱなブナ林にかわり、やがてダケカンバの疎林にかわり、間もなく森林限界。ところが、高度を上げるにつれてガスが出てきて、やがてホワイトアウトになってしまい、仕方なくダケカンバの林の中にテントを張る。午後になると晴れてきたので、高下岳をピストンする。森林限界からは、ベターツと広い雪面が頂上まで続いている、スキー滑降には極めて快適だが、惜しむらくは高度差がなく、テント場までわずか2分の滑降だった。和賀岳はガスの中で姿を見せなかった。明日は再び天気は下り坂とのこと。午前中だけでももってくれれば……。

1日（曇）何となく崩れそうな空模様だが、視界もあり、予定通り和賀岳を目指す。高下岳に登ると、昨日見え

なかった和賀岳が、谷一つ隔てた対面に、のっぺりと白く、山頂に道標のような物が立っているのまで見える。ここからU字形に稜線をずーっと回り込んで行かなければならない。根菅岳まではシールで歩き、根菅分岐までわずかなわずかな滑りを楽しむ。雲海が上がってきて、秋田駒、岩手山の山裾を覆っていく。雨が降りだすのも時間の問題かな、と思いつつも、行ける所まで行こうと、根菅分岐にスキーをデポして、アイゼンに替える。雪は極めて固く、アイゼンでスムーズに行けるが登ったり下ったり、ゆるくうねうねと和賀岳は遠く、分岐から2時間かかってようやく頂上に着いた。思ったより天気ももってくれたようで、周囲の展望もよい。秀麗な鳥海山、田沢湖はまわりの山々を映して大きい。そして、帰りは再び稜線を忠実に辿って根菅分岐へ。雪がゆるんできてドボドボ潜りだし、これが結構疲れる。結局、復路も2時間しっかりかかって根菅分岐に戻り、シールを付けると、やっぱりスキーは潜らないだけで最高だと思う。和賀岳への稜線は、スキーも充分使えらると思うが、うねうねとゆるい起伏が続きシール着脱はわずらわしそうだ。時間も早いので、この日のうちに下山することにする。高下岳から林道までが本山行中のハイライトで、ブナ林を快適に下る。雪は少し柔らかいが、滑るには上等だった。高度が下がるとグズグズの雪になり、おまけに樹間も狭く、疲れた身には応えてきたが、応えた頃には林道にとびだして、まあ、全体の印象を削ぐほどのこともなかったと思う。田中さんは、その日のうちに下山したが、私は林道終点にテントを張った。夕方から雨とのことだったので、雨避けになるかと杉林の混んだ所を選んでテントを張ったが、杉の枝に

たまった雫が、ポツタポツタとやかましい音をたてるのは、計算外だった。

2日(雨)真っ平らな林道はたぶん滑らないだろうと予想していたが、それでもやっぱり下りは速くて、登りの3分の1、20分位で大荒沢に着いてしまう。またぎのふるさとであったこちら辺りは、標高も低いのにまだまだ雪深く、カヤぶきの屋根がぼつてりと雪に覆われて、朝餉の煙が煙突からたち昇っていたりするのも懐かしい。朝1番のバスを待つて盛岡に出る。この日も雨で、雨と雨の間の2日間の好天を有効に使えたラッキーな山行だったと思う。

タイム：31日大荒沢8:00 — 林道終点9:00/9:20 — 1200M12:15/14:30 — 高下岳14:55 — 1200M15:12 (泊) 1日1200M6:10 — 根菅分岐7:30 — 和賀岳9:40/9:55 — 根菅分岐12:07/12:25 — 1200M13:20/14:00 — 林道終点15:08 (泊) 2日林道終点5:45 — 大荒沢6:10 (手塚 記)

